

元永拓郎〔著〕

心理職のコンピテンシーとは何か

——現場に活かすプロフェッショナルリズム

A5判並製・誠信書房

2025年6月刊

定価2,860円（税込）

評者＝中村菜々子（中央大学）



「心理職とは何ができる者なのか？」——これは評者が修士課程1年次に、指導教員の故上里一郎先生から投げかけられた問いである。この問いはずっと自分の胸にあり、心理職としての歩みを考え続ける原点となってきた。

本書は、心理職に求められる専門性と資質・能力を統合した概念、すなわちコンピテンシーを多角的に示している。著者は各種専門団体において、公認心理師のコンピテンシーに関する議論に深く関わってきた経験を踏まえ、心理支援の質を担保するために不可欠なプロフェッショナルリズムとコンピテンシーを解説し、心理職の成長を支える道筋を描いている。

第1章ではコンピテンシーを「基盤コンピテンシー」と「機能コンピテンシー」に大別し、全体の枠組みを提示する。第2章では基盤コンピテンシーとして、プロフェッショナルリズム、反省的実践、科学的知識と方法、関係性、多様性と個別性、倫理・法的基準と政策、多職種協働、それらの相互関連が解説される。第3章は機能コンピテンシーとして、心理的アセスメント、心理支援、コンサルテーション、心の健康教育・啓発、研究と評価、スーパーヴィジョン・教育、管理・運営、アドボカシーといった実践能力を整理する。第4章は職業的発達に焦点をあて、養成段階から実務5年目の自律段階、さらに役割拡大や価値創造へ至る職業的発達とコンピテンシーを提示する。第5章では保健医療・福祉・教育・司法・産業など分野別コンピテンシーの特性が示され、分野横断的な力量の重要性が強調されている。第6章では、臨床心理士・公認心理師制度の歴史的背景を踏まえ、コンピテンシー・モデルの発展と今後の展望が論じられている。

本書は、コンピテンシーの「正解」が書かれた本ではない。著者も繰り返し述べているように、各自が自律的に反省的実践を行い、自らの活動について考え続けていくこと自体がコンピテンシーの一部である。例

えば教育に携わる評者は、包括的なコンピテンシー・モデルをいかに自身の教育へ落とし込むかが課題だと考えた。このように、本書を読み各自がそれぞれの立場でプロフェッショナルとして何を行いうるかを考えることが重要だろう。

この反省的実践の姿勢は全編において一貫している。本書は著者自身が若い頃から今までの実践活動のなかで、心理職の専門性とは何かを問い直しながら編まれたものであり、多くのコラムから著者の反省的実践の歩みを追体験できる。実践の息づかいを感じながらコンピテンシーについて学べる点は大きな魅力である。

コラムだけを順に読むこともおすすめしたい。コラムは、著者が若い時からどのように自身のコンピテンシーを成長させてきたのかを率直な筆致で描かれている。心理職の大先輩が開示してくれる経験を傍らで聞くような学びが得られるだろう。

「クライアントの話を傾聴し、つらさを和らげることでしょうか」——冒頭の問いに、当時の自分はこう答えた。恩師は「話を聞くことは他職種でもできる」と仰ったが、答えは与えられなかった。自ら問い続けることこそが専門性を形づくるという示唆であったのだろう。本書は、その答えを問い続ける営みを力強く支えてくれる一冊である。